ともに生きる

――市民活動の現場で見えたこと――

金治　宏

キャリア形成学科の金治と申します。今日は「ともに生きる―市民活動の現場で見えたこと―」というテーマでみなさんにお話をします。この宗教講座の目的は「仏教の教えや人間の生き方に関する講演会を開催することで、自己を問う機会を提供すること」です。今日は、市民活動の現場で出会った人たちの取り組みを通して、「ともに生きる」とはどういうことなのか、「ともに生きる」ために何ができるのかについて私自身が感じたこと、考えたことをみなさんと共有できたらと思っています。

まず、簡単な自己紹介をします。私は、みなさんと同じ大学一年生の時に阪神淡路大震災に遭いました。一九九五年一月十七日です。姫路にある実家から神戸の大学に通っていたのですが、あの日は電車も動かない、大学は燃えているという状況でした。大学の後期

定期試験はなくなり、履修していた科目の成績ははすべて「N」、のちに認定の「N」だと説明を受けたことを記憶しています。何もかもが非常時でした。

私は、阪神淡路大震災で壊滅的な被害を受けた神戸市長田区で、「多文化共生のまちづくり」に取り組んだ経験があります。長田区は神戸市のなかでも外国籍住民が多く暮らす地域です。そんな長田区に開設された多言語ラジオ放送局FMわぃわぃで『恋する！NPO』という番組のパーソナリティを十年担当しました。その後、愛知県の名古屋市にある大学で働くことになり、その時から若年性認知症・家族交流会「あゆみの会」でパートナーをしたり、若年性認知症の人たちとまちをつくる取り組みをしています。今は京都市内に住んでいて、南区にある「ハピネス子ども食堂」でボランティアをしています。これが今、私が取り組んでいる市民活動で、これらの活動自体が研究テーマになっています。

今日、みなさんにお伝えすることは大きく二つです。まず、「少数者に焦点を当てたともに生きる取り組み」を三つ紹介します。その後で、私たちができることは何なのかをみなさんと一緒に考えてみたいと思います。

さっそく「少数者に焦点を当てたともに生きる取り組み」に入っていきます。一つ目は、二十七年前に起きた神戸の地震の後に被災地でどんな活動があったのか、外国籍の人

たちへの支援に焦点を当ててお話をしたいと思います。二つ目は、認知症の人に焦点を当てて、今、名古屋で仲間と取り組んでいることを報告します。三つ目は、キャリア形成学科の三年生が取り組んでいる認知症の人とその介護をする家族との交流についてです。

ともに生きる取り組み①：震災後の救援活動の現場で

では、神戸での「外国籍の人たちとともに生きる」事例を紹介します。私が活動に参加したのは長田区野田北部地区にある「たかとりコミュニティセンター」です。野田北部地区は、地震で全壊全焼が七〇％、半壊半焼が二五％という壊滅的な被害を受けました。そんな野田北部地区にボランティアの人たちが全国から集まりました。野田北部地区にはカトリックたかとり教会があって、教会の敷地にたつ司祭館の屋根が残ったことから、そこを拠点に地道な救援活動が始まっていきます。そこで生まれたのが災害救援ボランティア組織「たかとり救援基地」で、私が参加した「たかとりコミュニティセンター」の前身です。私自身は震災直後の活動には参加していません。きょうは先輩たちの取り組みを紹介します。

先輩たちは、代表を務める神田裕さんの言葉を借りると「ずぶの素人の集まり」でした。当時の記録を見てみると、中心的な役割を果たしていたのはアルコール依存症の自助グループの人たちだということがわかります。きっかけは、「たかとり救援基地」が拠点を置く教会で震災前からアルコール依存症の自助グループの取り組みが行われていたことでした。彼らは司祭館に泊まり込んで救援活動に取り組んでいきます。そんな「ずぶの素人の集まり」が、今では日本最先端の多文化共生のＮＰＯだと言われるようになっています。

これが、震災から十二年経った「たかとり救援基地」の様子です。教会の建物が燃えたためプレハブ小屋でボランティア活動が続いていたのですが、カトリック教会のみなさんが教会を新しく立て直してくださり、ＮＰＯが入るスペースを設けてくれたんですね。その完成パーティ（二〇〇七年五月二七日）の写真です。私は企画や裏方の担当を務めました。見てもらうとわかるように、ベトナムの民族衣装を着た子どもたちがいたり、ペルーの人たちがいたり、もちろん地域のみなさんも集まって、これからも多文化共生のまちをつくっていくんだという思いの伝わる写真です。本当に多様な人たちが参加していることがわかってもらえると思います。

たかとり完成パーティーの様子（2007年5月27日）
【たかとりコミュニティセンター提供】

では、神戸市長田区がどういうところだったのか、簡単に振り返ります。特徴は大きく二つです。一つは、社会的に弱い立場の人が多く住んでいたことです。高齢化率は一七・二％で神戸市全体の一三・五％より高く、生活保護受給世帯数は神戸市トップでした。生活保護受給世帯数が多いということは、所得の少ない人が多いということです。二つ目は、外国籍の人たちが数多く生活しているということです。元々、韓国・朝鮮の人たちが多く住んでいて、当時は新たにベトナムの人たちも住むようになっていました。長田区は震災の前からさまざまな課題を抱えたエリアでした。そこに地震が

「たかとり救援基地」が配布したチラシ
【たかとり救援基地提供】

起きたわけです。

こちらは当時配られたチラシです。震災直後の活動は、瓦礫の撤去や物資の配給、炊き出し、引っ越しの手伝い、屋根にブルーシートをかけたり、仮設住宅で少しでも生活しやすいように棚をつくるといった地道な活動が中心でした。代表の神田さんは「まちづくりはダチづくり」だとおっしゃっています。出会って、気づいて、新しい関係性をつくっていくんだと。先輩たちは活動のなかで高齢者や障害をもった人だけでなくて、外国の人たちも困っている、情報が届いていないということに次第に気付いていくんですね。英語での情報発信は当時もあったのですが、英語の通じ

ないベトナムの人たちはとても困っていました。

ベトナムの人たちに情報が十分に伝わっていたのかどうか見ていきます。震災から八日目の一月二十五日に「こうべ地震災害対策広報」が日本語で発行されます。それから十日ほど遅れて二月四日に外国版が出されましたが、英語のみでした。当時の神戸市広報課の課長さんは「とにかく広報紙を全部英文に直して、その英文については外国人コミュニティーへは全部配ったという形ですが、それ以外の言語についてはやれていないです」と語っています。

「こうべ地震災害対策広報」には、仮設住宅の申し込みなど大切な情報が掲載されていたのですが、英語版のみでした。そこで、「たかとり救援基地」のボランティアたちは、震災から二週間後の一月三十一日に「被災ベトナム人救援連絡会」を作って、行政情報をベトナム語に翻訳して、「被災ベトナム人救援ニュース」を発行していきます。最初は紙で発行して手渡しをしていましたが、情報を広く届けようということになって、ラジオ放送を素人ばかりで始めるんですね。震災から三ヶ月後に、ベトナム語、スペイン語、タガログ語、英語、日本語の五言語で、プレハブ小屋から海賊放送が始まっていきます。ラジオ放送の専門家がいるわけではありませんので、すべてが手探りでした。海賊放送は法律

「FM わぃわぃ」開局（1996 年 1 月 17 日）【たかとり救援基地提供】

違反ですが、長田区役所は必要性を認めてこれを黙認してくれたんです。さらに応援もしてくれました。そして震災から一年後の一九九六年一月一七日に、ポルトガル語と中国語を加えて七言語で多言語コミュニティ放送局「FMわぃわぃ」が開局しました。情報を必要な人に届ける取り組みです。市民が市民のために情報を発信する、国が後追いで免許を交付するといったこれまでにない多言語ラジオ局ということで、開局当日には取材するメディアが数多く集まりました。

震災から一年が経ったころ、「たかとり救援基地」にこんな看板がたちました。今でも残っています。

多くの仲間たちに支えられてここまできました。
一人一人が聞いたもの見たもの、
そして感じたものをかたちにしてきました。
人々は寂しさや悲しさを一つずつ喜びに変えてきました。
片付けは少しずつ進みますが、
最後の一人が町に戻ってくるまで地震は終わりません。
ここは、忘れ去られようとしている人々と共に歩む救援基地です。

野田北部に暮らす地域住民のみなさんも「たかとり救援基地」の活動を応援してくれました。みんなで地域のお祭りをしたり、まちの壁に絵を描いたり、さらに震災から二年が経った一九九七年八月にはゴミ出しのルールなどを多言語化した標識を設置しています。

看板に書かれたメッセージにあるように、「一人一人が聞いたもの見たもの、そして感じたものをかたちにして」いく。「まちづくりはダチづくり」。そんなともに生きる取り組みを紹介しました。

ともに生きる取り組み②：認知症の人とともに

次に、みなさんに紹介したい事例は「名古屋市でのともに生きる事例　認知法の人とともに」です。将来、言語聴覚士や福祉の仕事に携わりたいと考えている人、あるいはウェディングの会社や旅行会社で働きたいと思っている人もいるかと思います。今日は認知症の人が結婚式に出席する話も紹介します。

こちらは名古屋市若年性認知症本人・家族の会「あゆみの会」のクリスマス会の様子です。コロナの前の写真で、みんなマスクをしていません。みんな楽しそうで、誰が認知症なのかわからないと思います。

認知症について少し説明をします。今、日本では認知症の人は五〇〇万人いると言われています。六十五歳以上の高齢者の七人に一人の割合ですので、私たちが暮らす社会は認知症の人が「普通に」いる社会と言ってもいいかと思います。みなさんはアルバイトをしているコンビニやスーパーなどで出会っているはずです。認知症は、私自身は、「認知症の人とその周囲の環境との間に起こる現象」（徳田雄人『認知症フレンドリー社会』岩波

「あゆみの会」のクリスマス会の様子
【名古屋市認知症相談支援センター提供】

新書）だと捉えています。

認知症については多くの偏見が持たれてきました。そのため、なりたくない病気ランキングの上位に必ず認知症は入っています。偏見については、厚生労働省は二〇一二年に出した「認知症施策推進5か年計画」で、こう振り返っています。

かつて、私たちは認知症を何も分からなくなる病気と考え、徘徊や大声を出すなどの症状だけに目を向け、認知症の人の訴えを理解しようとするどころか、多くの場合、認知症の人を疎んじたり、拘束するなど、不当な扱いをしてきた。

認知症になるとできなくなることもあるのですが、一人暮らしをしている人もいるし、できることもたくさんあるんですね。今日は、山田真由美さんと鈴木泰弘さんの話をさせてください。

まず、山田さんは給食を調理するお仕事をされていましたが、仕事でミスが出たり、字が上手く書けなくなったりして、病院で検査をした結果、若年性認知症と診断されました。山田さんは認知症への偏見をなくしたいということで、名古屋市で初めて当事者として認知症サポーター養成講座の講師の資格を取られるんですね。そして、山田さんは認知症サポーター養成講座座だけでなく、全国各地で講演活動をされていきます。

山田さんは、おひとりで娘さんと息子さんを育ててこられました。その息子さんが結婚式をあげることになったのですが、山田さんは一人で服を着るのが難しい、フォークやナイフを使ってうまく料理を食べられないという困りごとがあったので、結婚式に出たいものの難しいと悩まれた時期がありました。そこで、山田さんは結婚式場のスタッフの人たちに相談をしたうえで、スタッフ向けに認知症サポーター養成講座を行って、認知症について説明をされたんです。この思いにスタッフの人たちは応えようとして、料理は食べやすいようにカットしたものを提供するなどの工夫をし、山田さんは結婚式に参加すること

ができました。まさに、共に生きるだなと私は思いました。きっと、今後、認知症や他の病気の人たちも、こちらの結婚式場では出席ができるようサポートがされていくんだろうと思っています。

山田さんは、二〇一七年五月に名古屋市西区の認知症専門部会の委員に就きました。認知症専門部会は医師や専門職らで構成されているのですが、社会に貢献したいと考えて、山田さんは当事者として参加しました。そして、二〇一七年六月に、認知症の人が認知症の人の相談に乗るという「おれんじドア」という取り組みをスタートします。そんな取り組みを受けて、名古屋市西区は「認知症ってどうってことない　西区はおもいやりのまち宣言」を発表します。宣言には山田さんや認知症当事者のみなさんが話し合われた内容が反映されています。

次に、鈴木泰弘さんの取り組みを紹介します。鈴木さんも若年性認知症と診断を受けています。鈴木さんは中日ドラゴンズが大好きで、中日球場にいつも行っていたそうです。野球が好きというつながりで、名古屋市立八王子中学校の野球部の部員たちに認知症のことやご自身のことを伝える機会があり、後日に野球部と「あゆみの会」のメンバーで野球をすることになりました。野球をするとなると考えないといけないことがあります。たと

えば、走る方向がわかりづらい人もいる、動いているボールを打つのが難しいといったケースもあるんですね。「どうするんだろう?」と心配していたのですが、その必要はありませんでした。実は、鈴木さんの話をきいた部員のみなさんで事前にいろんな準備をしてくれていました。試合が始まって、認知症の人がバッターボックスに立つと「一塁はこちらです」という矢印を書いた看板を掲げてくれたんです。グランドには、走る方向を書いた矢印も描いてくれていました。こうして矢印を描いてくれると一緒に野球ができるんですね。動いているボールを打つのが難しい人には、トスティーにボールを置いて打てるようにしてくれました。

認知症のことを理解してもらえたら、共に生きていける。もしかしたら野球だけかもしれないけれど、その可能性を示してくれたんだと私は思っています。鈴木さんが「野球をやろう」と言ってくれたこと、それを受け入れた八王子中学校野球部の部員たちのことをみなさんに伝えたいと思い、紹介しました。

ともに生きる取り組み③：学生たちが開催する世代間交流会

最後に三つ目の事例を紹介します。キャリア形成学科三年生の取り組みを紹介します。こちらの写真は、九月二十一日に行われた「京都市認知症フォーラム」です。認知症に関する先進的な取り組みに選ばれて、キャリア形成学科の学生たちが発表している様子です。フォーラムの様子はＹｏｕｔｕｂｅでも配信されました。学生たちがどんな取り組みをしたのか、学生たちが作成した動画で見てもらおうと思います。まちやキャンパスのある柳池学区で、認知症とともに生きる人、介護する家族のみなさん、地域のみなさんと交流する取り組みです。みなさんと同じ大学生がどんな取り組みをしているのか、ご覧ください。

―動画開始―

京都光華女子大学キャリア形成学部の竹中伶奈です。これから認知症サポーターの私たちができることについて話します。スライドをごらんください。

京都市認知症フォーラムでの発表の様子（2022 年 9 月 21 日）

こちらは二〇二〇年一〇月に開設された富小路まちやキャンパスです。このキャンパスは、中京区柳池学区にあり、地域の方々と交流する場として作られました。私たちはこの場を拠点に活動しています。

私たちが取り組んだことは大きく分けて三つあります。一つ目は、まちやキャンパスのある中京区柳池学区の課題を知るということです。集合住宅居住率が八四・一％と、マンションに住んでいる方がたくさんいます。また、老後の生活に備えた転入者が少なくありません。そこで、気軽に集えたり、相談しあえる居場所が求められているということがわかり

ました。

二つ目に、課題解決はすぐにはできないけれど、自らの出番、役割を考えるということをしようと決めました。そこで、認知症の人の思いを聞くことからはじめればいいと思いました。その中で、「地域に馴染める居場所があれば」という声を聞き、私たちは交流会を開催しました。柳池学区交流会の開催に向けて私たちがしたことについてお話します。私たちは看護や介護、福祉を専門に学んでいません。そのため、まず認知症の人の映像を見たり、本や新聞記事を読んだり、認知症サポーター養成講座を受講したりしました。そこで私たちにもできることがあるかもしれないというふうに考えました。

こちらの写真は柳池学区交流会の写真です。二〇二〇年六月十九日にまちやキャンパスで開催しました。柳池学区交流会の目的と参加者についてお話します。交流会は、認知症になっても安心して暮らすことのできるまちをめざして、認知症の人やその家族と交流し、思いや希望を聞くことを通して自らの出番、役割を専門職と共に考えるということが目的です。参加者は柳池学区に暮らすご夫婦、認知症サポーター活動促進コーディネーターを務めている京都市長寿すこやかセンターの職員の方など、多様な福祉やまちづくりの専門の方、そして京都光華女子大学キャリア形成学部の学生、合わせて十四名が参加しま

した。

交流会では自己紹介から始めました。その後、認知症の人からは病気とは関係なく、生い立ちや自分の好きなことなどをお話していただきました。支えている家族の方にも、自分の好きなこと、してみたいことなどをお話していただきました。

それでは、ここからは同じく京都光華女子大学の滝脇莉央がお話させていただきます。交流会を通して、当事者の方、それを支える家族の方からお聞きした、生い立ちやしたいことを聞き、その中で私たちの出番、役割について、専門職の方を交え、考えていきました。

こちらは実際に私たちが考えたことについて発表している場面です。私たちのグループでは、みなさんと一緒に料理会をしてみるのはどうかということや、朝市に行ってみるのはどうかということを提案させていただきました。これは交流会の最後に撮らせていただいた集合写真となっています。この写真を見ていただいてわかるように、当事者の方やご家族の方も含め、私たち学生も本当に楽しませていただいて、すごく良い時間になったなと思っております。

それでは、この交流会を通して私が気づいたことについてお話させていただきます。私

自身、この交流会を通して、いかに認知症について色メガネで見ていたか、ということに気づくことができました。それはお話を当事者の方とさせていただく中で、本当に楽しくお話をしてくださったり、私たちの質問に答えてくださっている様子を見て、私自身、認知症という一つの病気で見ていた部分があり、介護や医療を受ける人ではなく、一人の人間として生きていらっしゃることについて改めて気づくことができました。そして、もう一つ気づいたこととしましては、「私の心の老化がストップしました」という言葉を当事者を支えるご家族からいただいたことです。この言葉を通して、認知症の方を支えるというのは終わりがなく、本当に大変なことだと思うんですけど、私たちと関わることによって少しでも楽しい時間を過ごすことができたのかなと思っております。それに関することで、私たちにも出番があることに気づけたこともそうですし、それを支えてくれる、応援してくださる専門職の方や地域の方がいらっしゃるということについて気づけたのも私たちとっては大きなことになりました。そして、同じ思いを持つ仲間、もちろん私たち同じ大学の仲間もそうですし、それを支えてくださった専門職の方々、そして他の大学の方と関わる機会にもなったので、これは本当に交流会を通して気づくことができたと思っております。

こちらの写真はその実際の関わりを通して新しく行われた作戦会議の写真となっています。この作戦会議で、十月二十九日に新しく認知症の方と学生が交流する場を設けることを決めました。内容としましては、この当事者の方がもともと教師をされていたことから、寺子屋形式で学生と関わる機会を作るのはどうかということや、ご自分の気持ちを話す場所をつくるのはどうか、ご家族の方が以前コーラスをされていたということから、少し音楽を絡めたものを予定しております。

それでは今後に向けてです。私たちは認知症になっても安心して暮らすことのできるまちづくりに参加したいと考えております。そのまちづくりをしていくためには、仲間と協力しながら私たち一人ひとりができること、出番、役割について考え、積み重ねることが大切だと思っています。その中で私たちにできること、もちろん提案させていただいた中にもあった、一緒に何かをするということもそうですけど、挨拶や声かけなど日常的にできることも私たちの出番だと思いましたし、私たちの考えや活動について自分の周囲の人に伝えることも一つの役割になっているのではないかと考えております。それではこの交流会の時に撮らせていただいた写真を最後のスライドとしてこの発表を終わらせていただきます。ご静聴いただきありがとうございました。

――動画終了――

今、みなさんに見ていただいたのは、「京都市認知症フォーラム」で投影されたものです。六月にこの交流会をし、明日、二十七名が参加してくださって第2回の交流会を開催します。今回の学生たちが大切にしているテーマは「楽しい」です。キャリア形成学部の学生は福祉や介護、医療を専門に学んでいるわけではないのですが、自分たちは「楽しい」時間だったらつくれるんじゃないかということで、今の時間はコモンズで紙飛行機を作ったり、明日の準備をしてくれています。

ともに生きるために

最後のまとめに入っていきます。「ともに生きると私たちができること」。今回は少数者、マイノリティの人たちとともに生きることに焦点を当ててお話してきました。「ともに生きる」。例えば、認知症の人自身が社会に参加できるように変わるべきなのか、それとも社会の側が変わるべきなのか。私自身は社会の側が変わるべきじゃないかと思ってい

ます。障害学には、医学モデルと社会モデルという考え方があります。医学モデルは「障害者が困難に直面するのは『その人に障害があるから』であって、克服するのかその人の責任だとする考え方」です。一方、社会モデルは「社会こそが『障害（バリア）』をつくっていて、それを取り除くのは社会の責務だ」という考え方です。例えば、車いすで生活している人は、段差が少なくて、スムーズな移動ができるまちであれば、出かける際に障害をそれほど感じずにすむわけです。今、京都市内でもスローレーンという、ゆっくり買い物ができて、ゆっくりお金の支払いができるコンビニがあります。例えば、バスに乗った時に、どこで降りるか分からなくなるケースが認知症の人はありますが、英国では、乗る時に運転手さんに「私はここで降りたい」というカードを見せれば、降りるバス停で運転手さんが声をかけてくれるという取り組むがあります。つまり、バリアを取り除くのは社会の側の責任なんだということです。私は、社会的障壁をなくすことがともに生きることにつながると考えています。

　では、ともに生きるためにどうしたらいいか。一人ひとり、社会的障壁が違うので正解はありません。解決策の一つとして、その人自身を知ろうとすることが大切ではないでしょうか。バリアの多くは社会が作り出しています。外国籍の人たちが置かれた立場、具体

的には十九九五年の段階で彼らの多くは「避難所」という言葉を知りませんでした。どこに逃げればいいか分からなかった、情報もなかった。知り合いもいない。そんな状況を知り、関係をつくっていくことが大切だろうと私は思っています。

認知症の人を例に挙げると、大切にしてきた自分の家での暮らしを続けたいと思うのは当たり前だと思います。そこで私たちができることは何か。その人のことを知ろうとすることも大切だし、気にかけたり、「おはようございます」と挨拶をしたり、認知症になると曜日が分からなくなるケースもあるので、ゴミ出しを手伝うなどもあります。私は挨拶をするだけでも十分に「ともに生きる」働きかけだと思っています。そういった働きかけをする、その小さな積み重ねが、「ともに生きる」土台になるのではないでしょうか。気にかけたり、挨拶をしたりするなかで、関係をつくっていくということです。

ともに生きるは、「たかとり救援基地」の神田さんが言う「ダチづくり」なんだろうなと私は思っています。先ほど紹介した学生たちが取り組む交流会は、スマホ教室も開催しています。スマホを教えることが目的ではありません。スマホという入り口を通して地域の人と交流をしていく。それが学生たちの考えた自分たちの出番、役割です。「動画に文字を入れたいんやけど」という質問に、学生たちは検索をしながら答えていました。学生

の方が私と比べて伝え方が上手いし、参加してくれた高齢者も楽しんでくださっていて、みんなで写真を撮りあったりしていました。そういった関係づくり、ダチづくりが、「ともに生きる」ということにつながるんじゃないかと私は思っています。

みなさんは、これからいろんなことにチャレンジしていくんだろうと思います。大学の授業やいろんな地域貢献活動に参加するなかで、いろんな気づきがあると思います。その気づきを大切にしてください。みなさんのチャレンジを応援しています。

以上で「ともに生きる—市民活動の現場で見えたこと—」を終えたいと思います。ありがとうございました。